

金融パニックを回避せよ

——阪神・淡路大震災に見る中央銀行の存在意義

平成七年（一九九五）年一月十七日早朝の阪神・淡路大震災は、六〇〇名以上の尊い犠牲をはじめ筆舌に尽くしがたい多大な被害をもたらした。建物自体は堅牢を誇った日銀神戸支店も、店内はキャッシュネットの倒壊や金庫室内の現金収容箱の散乱など、「もし営業中で人がいたら」と、復旧作業に当たる職員たちを震え上がらせる惨状を呈していた。

危機対応の訓練に怠りはなく、災害対策のマニュアルも完備している。それでもなお、わが国の中央銀行である日銀が、その使命を全うするためには、次々と押し寄せる想定外の難題との不眠不休の戦いが必要であった。

取材・文 清水たくや

日銀神戸支店には、被災現場から火災で焼け焦げたお札や傷んだ硬貨が次々と持ち込まれた（左二点）。新しいものと引き換えるための鑑定作業は繁忙を極め、約半年間で一八〇件、金額にして八億円（紙幣一四万枚、硬貨一三万枚）の引き換えを実現し、「お金」への信頼を維持した（下）。



阪 神・淡路大震災からちょうど一〇年目の平成十七年一

月、神戸市では、震災の経験や教訓を継承して「安全・安心な社会づくり」に活かすためのさまざまな行事が催された。日本銀行の一六番目の支店として昭和二年に開設した日銀神戸支店でも、震災一〇年の節目に当たり、「にちぎんと災害対応」と題した「震災一〇年企画展」が開かれた。

この企画展では、それまであま

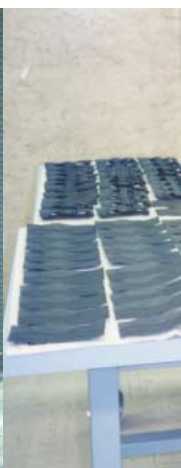
り公表されていなかった震災当時の神戸支店の対応や、震災の教訓を活かしたその後の日銀の災害対策について、震災直後の支店内の様子を撮影した貴重な記録写真なども交えて、広く一般に紹介された。現在も、展示内容は申し込み制による店内見学のコースに盛り込まれており、誰でも閲覧可能である。

実際に神戸支店を訪れ、展示品の数々やパネルにされた記録写真を目の当たりにすると、当時の現場のすさまじさが身に迫ってきて、誰もが言葉を失うに違いない。

自家発電さえもダウンしてしまふほどの激震により、金庫室内で信じられないような壊れ方をした現金収容箱、停電でOA機器が一切使用不能の状況下で記された手書きのメモや文書の数々、そして引き換えのために被災現場から持ち込まれた火災の熱で焼け焦げた大量のお札……。

従来、都市直下型地震の危険性については憶測も含めてさまざまな予測がなされてきた。しかし、よもやこれほどの大地震が神戸の地を襲おうとは、誰も思っていな

*（注）……文中の敬称は省略しました。また、役職名などはすべて当時のものです。



現金収容箱が散乱した金庫室内、右と崩れてしまったお札パックの山（上）。整然と積まれている重い現金収容箱やお札パックがこのような崩れ方をすると、通常ではあり得ない事態。余震が続く中、現金の円滑な供給のために、自衛隊出身の庶務職員四名が文字とおり命をかけて黙々と金庫室内の整理を行い、予想をはるかに上回るスピードで震災当日の夕刻には整理を完了。三日間で一〇〇億円近い現金の支払いを果たすことができた。



かったといっても過言ではない。

日銀神戸支店の職員とてそれは同じこと。一月十七日午前六時前あまりの揺れの激しさに、早晩の暗闇の中、誰もが最初はパニック状態になった。

だが、日ごろの訓練のたまものというべきが、その後の行動は迅速だった。余震が続く中、地震から約一時間後の午前七時ころには支店長以下、次長、調査役、営業・業務・発券・文書の四課長、二副調査役の計九名が、市内の惨状に愕然としながらもどうにか出勤してきて、支店前に参集した。そして、ほかの職員たちも大半が自らも被災者であるのに、その後続々と出勤してきたのである。

災 害時における日銀の最大の使命は何かといえば、それは、「地域住民に金銭面での動揺を与えない」ということに尽きる。

特に、水道や電気などのライフラインが寸断され市民が不安な生活を余儀なくされているとき、「お金は何よりも頼りになるライフライン」として重要な意味を持つ。

通帳も印鑑も瓦礫に埋まり、お札は火災で灰となり、銀行はいっ

開くかわからないといった震災直後の大混乱状態の中で、もしお金に対する信頼を維持できないような事態が起きたら、パニックにつながりかねない。中央銀行たる日銀の神戸支店として、やるべきことは山ほどあった。

中でも、震災で傷んだお金（紙幣、硬貨）を新しいものと引き換える業務は二日後の十九日から繁忙を極めるが、そこで織り成される人間模様は、まさにドラマと呼ぶにふさわしい光景の連続であった。焼け焦げたお札が復元され、絶望の縁から引き戻されて歓喜と感謝の涙を流す被災者。その姿を胸が熱くなる思いで見守る神戸支店の発券課員と本店、大阪・名古屋支店からの引換応援者たち。

ただ、十七日の朝の段階では、神戸支店を主戦場とするパニック回避に向けた日銀の戦いが始まったばかりで、二日後どころか先がまったく見えない状態だった。

堅牢を誇る支店の建物自体はほとんど無傷だったが、自家発電がダウンしていたため、非常灯と懐中電灯の明かりを頼りに、まず「日本銀行の命」ともいふべき金庫



道路に倒壊した柏井ビル（上、写真提供：神戸新聞社）大地震のすさまじさを如実に物語るこうした光景が市内各所で見られた。

幸い建物自体への被害はなかった日銀神戸支店も、事務室内では書類が散乱し、キャビネットや机の一部が倒壊するなど大変な状態だった（左2点）文書課員の機転によるボラロイドカメラでの撮影で、支店内部の貴重な記録写真が残された。

室に向かった。

中を見て、誰もが仰天した。整然と積み重ねていたはずの相当な量の現金収容箱が、まるで巨大な足で踏み潰されたかのように崩れ、散乱していたのだ。発券課長の指揮のもと、早々に金庫室の整理が始まった。庫内整理に割ける人員はたったの六名。片づくまでに相当な日数がかかることは覚悟しなければならなかった。

事務室内の様子はさらに凄惨だった。もしこれが営業時間中だったらどのような事態になっていたか、想像するだに恐ろしい光景が目の前に展開されていた。

こうした中でも、七時半すぎには本店との電話回線を確保し、自家発電ダウンで使用不能のシステム処理の代行を依頼するなど、「現金の円滑な供給」という日銀の基本使命を果たすための体制の確保は着々と進んだ。

ダウンしていた自家発電も、支店の技術職員が、倒れたタンスで頭に大けがを負った妻の世話を娘に託し、九時に出勤して復旧させただけでなく、一月二十二日午後三時の一般通電まで発電機の脇で

寝泊まりし、文字どおり死守した。

自家発電復旧後の十七日夕刻には、早くも発券課長が金庫室の整理完了を支店長に報告した。信じられないスピード。朝から非常食のカンパンしか口にしていないのに、金庫室内で重い現金収容箱を黙々と整理した四人の自衛隊出身の庶務職員の奮闘に負つところが大であった。発券課長は涙ぐんでいる。支店長のほつも、ねぎらいの言葉をかけたのにも、胸が詰まって声にならない。

こうして、日銀神戸支店は、震災後三日間で約一千億円にのぼる現金の円滑な供給という基本使命をつつがなく果たすことができた。

金

融システムの安定を図るために、大蔵省（現財務省）近畿財務局神戸財務事務所と日銀神戸支店の連名で行つ金融特別措置も、十七日の午前中に電話のつながる支店長室で無事に発動の手続きを完了し、正午すぎにはラジコで発動が報じられた。

金融特別措置とは、被災者の便宜を図るための特別措置で、通帳や印鑑がなくても預金の引き出しができるように金融機関に要請す

るものである。

もつとも、そのときはまだ停電中でワープロもファクスも使用不能だから、文書は手書き。しかも神戸財務事務所長の印鑑は火災で持ち出せなかったため、赤鉛筆のサイン。何から何まで規格外の前代未聞の公文書であった。報道機関への通知文も手書きで、記者クラブがあるポートアイランドへの道が寸断されていたため、支店の職員が自転車直接、神戸新聞やNHKなどに通知文を届けた。

パニックを回避するためには、日銀が現金供給体制を確保しただけでは不十分で、民間金融機関の窓口が機能していないと一般市民はお金が使えない。

そこで神戸支店では、必要な飲料水の確保を兵庫県に依頼し、警備を兵庫県警に要請したうえで、店舗が倒壊した金融機関（一四行庫）への臨時窓口提供に踏み切った。原爆投下直後の昭和二十年八月八日に広島支店で実施して以来日銀史上二度目の提供である。一月二十日から二月三日まで休日の臨時営業日も含めて続けられ、約三〇〇名の来客があり、預金引

A group of approximately 15 people, including men and women of various ages, are standing in a line outside a building entrance. Each person is positioned behind a wooden barrel that serves as a ballot box. The barrels are arranged in a row, and the people are looking towards the camera. The building has a large glass entrance and a sign above the door. A security guard in a uniform is standing near the entrance. The scene is set in front of a modern building with large windows and a concrete facade.



平成7年1月17日

大阪府建設部都市計画課長
部長 公男

日清銀行神戸支店
佐藤 幹治

今般の地震災害に伴う金融特別措置について

今日1月17日に発生した地震により被害を受けた地域の被災者に対し、別紙の便宜措置を実施したい。

1. 預金口座・通帳と紛失した場合その預金者であること確認して振込しに応ずること。

2. 届出の印鑑のない場合については封印に代すること。

3. 事情により予定定期預金、定期積金の期限が近一長しに代すること。また、これを担保とする貸付に代すること。

4. 今回の地震による被害のための支取期間が経過した者について関係金融機関と通意談合のうえ、取り立てができることとする。

5. ような大規模の引換に代すること。

6. 印鑑と紛失した場合の相違に代すること。

7. 1-6に定める措置について実施店舗にて店頭指示を行うこと。

8. 本取組は、平成7年1月17日から平成7年1月20日まで行うこと。



神

し出されていた。こうした復興の土台に、自らも被災者でありながら、職務を全うするために不眠不休で懸命に努力した人たちがいたことを思うと、万感胸に迫るものがあった。

日銀神戸支店の女子職員の中には、震災当時、炊き出しのおにぎり作りを頑張り返すぎて、手がふやけて皮がむけてしまった者もいた。また、自宅の菜園で取れた野菜でサンドイッチを作ってリュックに詰め、山登りのような格好で徒歩で出勤してきた者もいた。男女を問わず、そこに共通する思いは、「日銀職員であることの誇り」であるように思える。

大震災の貴重な経験と教訓は、神戸支店のみならず日銀全体の災害対策や危機対応に十二分に活かされている。本店と支店が一体となつたしなやかな結束力で、金融システムの安定を維持し、人々の暮らしを「お金」の面からがっちり支え続けている日銀の営み。その基盤には、明治十五年の創立以来、どのような大災害が発生しても万難を排して職務を全うしてきただけでなく、^{まもろし}た矜持が脈々と息づいている。